

## 簿記・会計

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

## 1 前 文

令和6年度共通テストが実施された。令和6年度共通テスト本試験の「簿記・会計」の受験者数は、＜資料1＞で示すとおり、昨年度より85名減少した。共通テストの「簿記・会計」は今年度で終了するため、簿記・会計を学んでいる生徒にとっては、学びの成果を進路実現に生かす最後の機会となった。

## ＜資料1＞「簿記・会計」の受験者数・平均点の推移（大学入試センター発表）

年 度	受験者数	平均点
平成 30	1,487	59.15
平成 31	1,304	58.92
令和 2	1,434	54.98
令和 3	1,298	49.90
令和 4	1,434	51.83
令和 5	1,408	50.80
令和 6	1,323	51.84

共通テストは、センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ、知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題が重視される。また、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定が重視される。本年度の平均点は、昨年度の50.80点より1.04点上がり51.84点となったが、全般的に難易度は適正であると思われる。これは、作問に当たり受験者の実態を的確に捉え、過年度の出題等について綿密に分析・検討を行い、今回の出題に反映された結果だと考えられ、評価できる結果であった。

以上のことから、「簿記・会計」の内容・範囲、難易度や分量、表現及び形式、また、センター試験及び共通テストにおける要望や意見への対応等を踏まえ、次のような観点から分析・検討を行う。

- (1) 問題作成方針を踏まえて、知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め、バランスの取れた出題となっている（出題のねらい）
- (2) 学習指導要領の範囲内から出題されており、特定の分野・領域に極端に偏っていない（出題範囲）
- (3) 問題で使用される資料等が、特定の教科書に偏っていない（題材）
- (4) 高等学校における学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており、その場面設定が、教科・科目の本質に照らし必然性のある形で出題されている（問題の場面設定）
- (5) 試験問題の構成（設問数、配点、設問形式等）は適切である（問題構成）
- (6) 文章表現・用語は適切である（表現・用語）
- (7) 問題の難易度は適正である（難易度）
- (8) 得点のちらばりは適正である（得点のちらばり）

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

## 2 試験問題の範囲・構成等

今回の出題内容は、全ての問題において学習指導要領の範囲内であり、特定の教科書や分野に偏ってはならず、学習指導要領の目標に沿って、簿記・会計の基本的な仕組みの総合的な理解度を見ることができる問題となっている。令和6年度の「簿記・会計」の出題内容と配点、学習指導要領との関連を整理すれば、＜資料2＞のとおりである。

### ＜資料2＞共通テスト「簿記・会計」の出題内容等一覧

#### 第1問（配点40）

設問(配点)	出題内容	学習指導要領との関連
A (20) 問1 (2) 問2 (2) 問3 (2) 問4 (2) 問5 (8) 問6 (2) 問7 (2)	○財務会計に関する説明の問題 ・財務会計の機能 ・財務会計の前提条件 ・財務諸表の種類 ・企業会計原則（一般原則・重要性の原則） ・決算手続き	簿記(1)簿記の基礎 ア簿記の概要 エ簿記一巡の手続 財務会計 I (1) 財務会計の基礎
B (20) 問1 (8) 問2 (2) 問3 (4) 問4 (2) 問5 (2) 問6 (2)	○生徒と先生との「簿記」の授業中の会話形式による問題 ・3分法と分記法の違い ・費用の繰延べと見越し ・再振替仕訳 ・利益の違いをもたらす会計処理	簿記(2)取引の処理 イ商品売買 (3)決算 ア決算整理

#### 第2問（配点30）

問1 (2) 問2 (4) 問3 (10) 問4 (6) 問5 (2) 問6 (6)	○単一仕訳帳制度を採用する個人企業の1月中の取引記録から、仕訳帳・総勘定元帳・売掛金元帳・買掛金元帳・商品有高帳・受取手形記入帳・支払手形記入帳の空欄（勘定科目・金額・元帳番号・商店名・てん末）を答える問題 ○売上原価の金額を答える問題 ○月末における勘定残高と商品数量を答える問題	簿記(1)簿記の基礎 ア簿記の概要 (2)取引の処理 ア現金・預金 イ商品売買 ウ債権・債務 (5)会計帳簿と会計組織 ア会計帳簿
---	---	--

#### 第3問（配点30）

問1 (6) 問2 (24)	○株式会社の残高試算表及び期末の取引・決算整理事項等から、残高試算表・8桁精算表の空欄（勘定科目・金額）を答える問題	簿記(3)決算 ア決算整理
-------------------	--	------------------

### 3 試験問題の内容・分量・程度・表現等

全体的な難易度は昨年度と比べ、やや易化したと思われる。資料の読み取りに必要以上の時間を要したり、解答時間が足りなくなるといったことはなく、適切な分量であった。

第1問は、設問Aと設問Bで構成され、Aは財務会計に関する説明を読み、適切なものを選択する問題である。財務会計の機能、財務会計の前提条件、利害調整機能に関する事例、金融商品取引法と会社法における財務諸表の種類の違い、「企業会計原則」一般原則の適用例、重要性の原則の説明、決算手続きにおける仕訳に関する理解度を問う問題であり、内容・程度共に適切であった。Bは「簿記」の授業中における生徒と先生の会話からの出題となっており、商品売買取引を3分法で記帳した場合と分記法で記帳した場合の違いを問う問題を軸として、決算における処理に関する知識と考え方をも問う良質な問題であった。第2問は、単一仕訳帳制度を採用する個人企業の1月中の取引記録から、仕訳帳・総勘定元帳・売掛金元帳・買掛金元帳・商品有高帳・受取手形記入帳・支払手形記入帳の空欄（勘定科目・金額・元帳番号・商店名・てん末）を答える問題であり、帳簿間のつながりに関する理解を問うものであった。第3問は、株式会社の残高試算表に期末の取引を加え、決算整理等を行った上で、残高試算表及び8桁精算表の空欄（勘定科目・金額）を答える問題である。期末の取引や決算整理事項等も基本的なレベルであり、比較的解答しやすい問題であった。

全体として、基礎的・基本的な問題がやや多いが、思考力・判断力を問う問題もバランス良く出題されており、出題のねらいも明確であった。また、例年どおりの大問が三つの問題構成は、解答時間のバランスを保つ上で重要な役割を果たすことから、大問それぞれのボリュームも適切であった。受験者には「簿記・会計」に関する知識や仕組みについての十分な理解が求められており、総合的理解と学習の達成度を測る問題として適切であった。設問文や形式は明瞭簡潔で無駄や不足はなく、文章表現や漢字表記も難解にならないように配慮されている。ページ配置についても読み取りやすく適切であった。また、各資料に付されている「(注)」もフォントサイズが適当な大きさで、受験者が解きやすいようにという配慮を感じた。配点については、ほとんどが2点問題であり、受験者の得意・不得意が点数の差に結び付かないよう配慮されている。また、1点問題については、売掛金と貸倒引当金の解答が累積にならないような配慮であり、多くの点でこれまでのセンター試験及び共通テストにおける意見・要望が生かされており、おおむね適切な出題であった。

第1問 Aは、財務会計に関するリード文を基に問1から問7までの空欄補充や関連知識を問う問題構成になっており、それぞれ基礎的・基本的な理論を問う問題であった。問1は、財務会計の機能についての知識を、問2は財務会計の前提条件についての知識を問う問題であった。問3は利害調整機能が果たされている事例を選択する問題であり、知識・理解の質が問われる問題であった。問4は金融商品取引法における財務諸表には含まれるが会社法における計算書類には含まれないものを選ぶ問題であり、企業会計制度の特徴を理解しているかが問われた。問5・問6は企業会計原則に関する問題であり、一般原則の適用例を読み、当てはまる原則を選ぶ問題と重要性の原則の説明として最も適当なものを選ぶ問題であった。それぞれの原則の特徴が理解できていないと正解に結び付かない。問7は決算の手続きの下でのみ行われる仕訳を選ぶ問題であり、給料勘定を損益勘定に振り替える仕訳を解答する基本的な内容であった。

Bは、受験者が経験したであろう簿記の授業中における生徒と先生との会話形式による問題であり、共通テストの問題作成方針である「どのように学ぶか」を具現化した内容であった。具体的には商品売買取引についての出題であり、3分法での処理はなじみ深い、分記法での処理がどれだけ理解できているかが解答のポイントとなる。問1の「サ」は3分法における22

日の取引の金額を売上勘定の記入面から推定する。会話文中の「商品売買については現金取引のみ」という言葉が読み取れていれば解答は容易であったであろう。次に、分記法における商品勘定の9日の「シ」については3分法における仕入勘定の9日の記入面から推定し、13日の「入」については3分法における現金勘定の13日の記入面から推定する。問2は商品勘定（分記法）、仕入勘定（3分法）、売上勘定（3分法）を資産・負債・収益・費用に分類する基本的な問題であった。問3の「チ」については商品勘定と商品売買益勘定から売上高の計算をするという分記法の特徴が分かっていたら正解に結び付かないため、難易度は高い。また、決算時に売上高を二つの勘定から改めて計算する必要があることについては、理解しづらかったのではないだろうか。問6は利益額に違いをもたらす会計処理を選ぶ問題として、減価償却方法が異なれば費用計上額も異なり、結果として利益の金額にも影響することが理解できているかを問う問題であった。

第1問全体としては、「簿記・会計」の基礎的な知識を問う適切な問題構成となっており、比較的解答しやすい問題であった。

第2問 単一仕訳帳制度を採用する個人企業の1月中の取引記録から、仕訳帳・総勘定元帳・売掛金元帳・買掛金元帳・商品有高帳・受取手形記入帳・支払手形記入帳の空欄（勘定科目・金額・元帳番号・商店名・てん末）を答える問題である。問1の「ア」については、「資料3」の売掛金元帳（広島商店）の20日の記入面から判断でき、基礎的な内容である。問2の「イ」は、小書きから為替手形の振り出しであることが分かるが、為替手形について理解不足の受験者も多く、正答率は高くなかった。「ウ」については、小書きから容易に勘定科目が推定できる。問3の「工オカ」は、約束手形#26の不渡りであることから、「資料5」の受取手形記入帳の手形番号26の金額ということが分かる。「キクケ」は、「資料5」の受取手形記入帳の1月1日時点での残高を求めれば良い。手形番号54・26共にてん末が1月になっており、12月中の動きがないことから、両者の合算額が期首の残高であることが分かる。よって手形番号54については1月16日の取引から¥140を求め、手形番号26の¥130と合算した¥270となる。「コサ」は、「資料1」の仕訳帳の1月10日の取引から求めることができる。「シス」は、「資料1」の仕訳帳の1月14日の取引から仕入金額を計算すれば良いが、引取運賃を含めた金額で単価を計算する必要があるため受験者の思考力が問われた。「セソタ」は、「資料1」の仕訳帳の1月8日の取引から手形番号84の金額を求めることができる。問4の「チ」は、手形番号19から「資料1」の仕訳帳で自己受為替手形であることが分かるが、手形に関する理解が乏しい受験者にとっては、その振出人を推定することは難しかったであろう。「ツ」及び「テ」については、その手形番号から「資料1」の仕訳帳における取引を推定することができる。問5は、「資料1」の仕訳帳の1月8日の取引から販売数量は8個と計算できるため、同日の商品有高帳に先入先出法で記入すれば売上原価の¥312を求めることができる。なお、計算においては、3日の仕入値引きを考慮する必要があるため、受験者の思考力が問われる問題であった。問6の「ナニヌ」は、「資料2」の現金勘定の貸借差額から¥280となり、「ネノハ」は、「資料5」の支払手形記入帳から1月末残高は¥160となる。「ヒ」は、「資料4」の商品有高帳の残高（10個）から「資料1」の仕訳帳の1月20日の取引分（6個）を引いた4個が次月繰越数量となる。商品有高帳の記録が14日までであることに気付くことが重要であり、受験者には注意力が求められた。

第2問全体としては、仕訳帳の小書きを手掛かりに関連する総勘定元帳や補助簿と突合することができれば解答しやすい問題が多かったが、思考力や注意力を要する問題も適度に含まれており、バランスの良い問題であった。

第3問 株式会社の残高試算表に期末の取引を加え、決算整理等を行った上で、残高試算表及び

8桁精算表の空欄（勘定科目・金額）を答える問題である。資料1で決算整理前の残高試算表が与えられ、資料2には資料1以降の取引が記載してあり、正確な仕訳が要求された。現行の学習指導要領では学習範囲外となった未着商品売買や委託販売に関する内容も盛り込まれており、いずれも基本的な内容であるが、積送品勘定の借方「イウ」の正答率は高くなかった。資料3は決算整理事項等の処理であるが、いずれも基本的なレベルの内容であった。資料1から資料3までの時系列で取引を正確に読み取る力が問われた。「スセ」は、有価証券の決算日の時価が¥88であることに加え、損益計算書における有価証券の評価が借方¥8であることから評価損であることを判断し、決算整理前残高¥96を求める。逆算での計算となるため、思考力を要し正答率は高くなかった。また、資料2の31日の当期首に発行した社債に関する処理では、発行・利払い（年2回）・償却原価法による期末評価と、それぞれ各時点での適切な会計処理が問われている。特に、「ヒフ」は利払いに加え、償却原価法による評価も考慮する必要があるため、正答率は高くない。社債に関する全般的な理解度を測る良問であった。

第3問全体としては、決算に関する幅広い知識を問う基礎的な問題であり、取引の量、推定箇所数は共に適切で、バランスの取れた構成となっていた。

#### 4 ま と め（総括的な評価）

- (1) 今回の問題は、思考力や判断力を発揮して解く出題がやや少なかったように感じるが、受験者の学習達成度を適正に判定できる問題である。今年度で共通テストでの「簿記・会計」は終了するが、簿記・会計が社会において重要な知識であることは変わらず、高等学校において簿記・会計を理論的かつバランス良く学ぶことの必要性は変わらない。簿記・会計を学んでいる生徒にとって、学びの成果を進路実現に生かす機会が減ってしまうことは、残念に感じる。
- (2) 受験者が解答をする上で、適切な時間が確保できるような問題作成であった。また、「簿記・会計」は高校入学後に初学することを踏まえ、学習指導要領の範囲内の出題、教科書で使用されている表現の使用等も考慮されていた。